



『日本近世生活絵引』奄美・沖縄編編纂共同研究 琉球を五感で調べる

富澤 達三
(非文字資料研究センター 研究協力者)

はじめに

2013年3月28～31日まで、『日本近世生活絵引』奄美・沖縄編編纂共同研究（以下、「奄美・沖縄絵引研究班」）の調査として、得能壽美氏（法政大学沖縄文化研究所）・本村育恵氏（青山学院大学大学院）とともに、沖縄県那覇市周辺を訪れた。琉球地域をフィールドとし、沖縄本島にも明るい得能・本村の両氏と異なり、私にとって初の沖縄本島訪問である。

1. 近世の画像資料

近世社会は文書^{もんじょ}だけでなく、膨大な画像資料をも残した。江戸時代は狩野派に代表される、武士身分を持つ大名お抱えの絵師たちが、絵描きの頂点であった。彼らは伝統的な花鳥風月を描き、ときに余技として市井の風俗や町の賑わいを描くこともあった。18世紀後半になると、江戸では庶民の人気に支えられた浮世絵師が登場する。最高の浮世絵師は、90歳の生涯で膨大な作品を描き続けた葛飾北斎であろう。文人たちも嗜みとして、多くの絵を残した。教養人は花鳥風月のほか、余技で各地の風俗や自然災害のようす・大事件を描き、それらは歴史資料として活用されている。例えば菅江真澄は文字と画像で各地の風俗を記録した。村や町の好事家で絵心のある者は、噴火や大地震などの災害・一揆・異国船情報などの大事件を、素朴な、時には緻密な絵で記録している。

幕末になって、対象を即物的に写し撮ってしまう写真が登場すると、人々の視覚は大きく変化するが、それでも事物を描いて記録することは続けられた。人間の目と頭脳を通して観察され、描かれた事物は、何を省略し何を強調しているのか。「絵」や「図」を読み解き、過去を探る資料とする作業は、着実に進んでいる。

2. 調査の概要

那覇調査は3月28日午後から始まった。今回の調査

では、「奄美・沖縄絵引研究班」が読み解きを進めている「琉球交易港図」（浦添市美術館蔵）の実見が大きな目的である。まず同図で描かれた那覇港の現在を概観するため、港を一望できるガジャンピラ公園（那覇市小祿）より景観を調査した。那覇港は改修が進み、江戸期の姿からは激変している。得能氏によると、かつては現在公園のある高台から港まで抜ける坂道があったが、今は森に覆われてしまったという。

その後、波上神社・外国人墓地を巡検。沖縄県立博物館・美術館では、「琉球交易港図」と構図や描写が似る「首里那覇港図」をはじめとする那覇港を描いた屏風絵、進貢船の縮小模型を見学した。

3月29日は、沖縄県立図書館、沖縄県公文書館で調査ののち、浦添市美術館へ。同館所蔵の「琉球交易港図」と葛飾北斎の「琉球八景」の熟覧が大きな目的である。

①「琉球交易港図」

「琉球交易港図」（図1）は六曲一隻（縦120cm×横290cm）の屏風である。那覇港から首里城までを俯瞰し、交易に訪れたさまざまな船・那覇港の賑わい・港周辺の人々の暮らしが細部にわたって描かれている。この屏風は、明治19年（1886）ころ鹿児島県から赴任してきた巡查・高良八十八が土産として持ち帰ったものである。のち絵の部分だけが剥がされ、昭和62年に浦添市美術館準備室に寄贈され、修復により再び屏風となった。

博物館展示図録や書籍で見たかぎり「人物が小さく描かれ、略画風である」との先入観があったが、実物を見ると細部まで丁寧に描かれていることがわかった。

「琉球交易港図」と似た作品に、前出「首里那覇港図」（沖縄県立博物館・美術館蔵）・「琉球貿易図屏風」（滋賀大学経済学部附属史料館蔵）がある。滋賀大の作品とは、構図や細部の描写が大変似ており、中国製と推定される竹紙が使用されていることから、同じ工房で制作された可能性が指摘されている。



図1 琉球交易港図



図2 葛飾北斎画「琉球八景」全八図

②「琉球八景」

葛飾北斎による浮世絵版画「琉球八景」(森屋治兵衛版、横大判)は、天保3年(1832)琉球使節の江戸上りを当て込み制作された、八枚揃の作品である。コンパクトにまとまったシリーズで、展示でも出品されることの多い人気作である。今回、全てを熟覧できる大変貴重な機会に恵まれた(図2)。

浦添市美術館では、「琉球八景」を地域を描いた資料として調査研究している。2012年には横浜在住の画家・岡信孝氏より八図すべての校合摺り(浮世絵版画制作の初期段階で、版下絵を彫刻して作った主線だけの摺絵)が寄贈され、新たなコレクションとして加わった。

北斎自身是那覇を訪れておらず、「琉球八景」は江戸幕府が天保2年に出した版本『琉球国志略』の挿図を参考に制作された。浦添市美術館では描かれた8箇所の景観と現況を比較した作業も行っており、今回の調査では「筍崖夕照」(波上宮。那覇市若狭)と「中島蕉園」(那覇市泉崎)を訪ねることができた。

③首里城調査

3月30日、午前は得能・本村両氏とともに沖縄県立芸術大学のシンポジウム「川平朝申とその時代」に参加。午後は私一人で首里城周辺の調査を行った。「琉球交易港図」のプリントアウトを片手に首里城周辺を歩き、景観・建造物などの調査を行った。

沖縄戦によって破壊された首里城は、戦後復元されたが、復元作業の概要は城内展示施設の映像で詳しく説明されている。城内と周囲を調査したが、各種の首里城絵図に描かれた琉球臨濟宗の総本山・円覚寺、その総門前の円鑑池と浮島の弁天堂、浮島へと渡る天女橋を「琉球交易港図」と照合した。

おわりに

実録映画の傑作『仁義なき戦い』(東映、1973)の脚本を手がけた笠原和夫氏(1927-2002)は、ジャンルを問わず、現実を題材とした作品の脚本執筆の際には、関係者への聞き取り・関連資料の徹底調査を行ったことで知られる。さらには舞台となる土地での調査(シナリオ・ハンティング)を必ず行い、絵空事ではない脚本を完成させた。舞台となる土地で調査を行うこだわりについて、笠原氏は以下のように述べる。

その土地の空気を吸うだけで書くものが違ってくるのだから仕方が無い。古い神社に寄って、石垣の裏に彫られた寄進者の名前をみるだけで、その土地の特徴ある名前がわかる。そんな細部を知ること、ふと何かが見えてくることもあるのだから。

『映画はやくざなり』(新潮社、2003)、125頁

笠原氏は、現地調査で体感する風土・食物・住民の気質・景観や町並みなどは重要な一次情報であり、視覚・聴覚・触覚・味覚・嗅覚の五感を使い、自分自身のフィルターを通して内面に取り込み、創作や研究活動などの糧とすることの重要性を述べている。

地域史研究でも現地調査は重要である。私自身、琉球は未知の地域であった。今後も予定される琉球調査で、「五感」をフルに使って得るさまざまな情報を、「奄美・沖縄絵引研究班」の作業に活かしていきたい。

<参考文献>

謝敷真起子「琉球交易港図考」①～⑤『美術館ニュース きよらさ』No.18・19・23・25・26号、浦添市美術館、1998-2000

岩崎奈緒子『「琉球貿易図屏風」の成立について—下貼文書の検討から—』『研究紀要』第34号(滋賀大学経済学部附属史料館、2001)

『北斎の描いた琉球 琉球八景』(浦添市美術館、2010)